

# 「壁面構成」作成指導の実践的研究

太田 好恵・渡辺 義生

## A Practical Study of the Guidance for Making Decorations on the Walls

Yoshie OHTA and Yoshio WATANABE

### I はじめに

幼稚園や保育園を訪れて、まず気づくことは、玄関、廊下、各保育室にみられる装飾である。この装飾は幼児教育施設独得のものであり、その特徴は、幼児に親しみを覚えさせ、心の安定をはかり、想像をふくらませ、自然の事象や季節、行事や人の生活を意識化させるように工夫されているところにある。この意味からこの装飾は、幼児の成長発達にかかわる重要な保育環境の要素であるといえる。

「壁面構成」はこの装飾の一つであり、それは教師によって作られているものが殆んどである。従って、幼児教育に携わる教師の資質の一つに「壁面構成」を作成する技能が求められている。しかし、「壁面構成」に関する実習や、その資料や報告も少なく、経験的に行われている状況である。そこで、「壁面構成」が行われている実態、教育実習における「壁面構成」作成の状況、学生の意識を調査するとともに、保育者養成

校において、作成能力を習得するための指導のあり方についてまとめる必要を感じ、この研究にとりくみ、若干の知見を得たので報告する。

### II 「壁面構成」の実態及び学生の意識について

昭和59年からの3年間、広島文化女子短期大学幼児教育学科の学生について、教育実習が終了したとき、アンケート調査を行った。

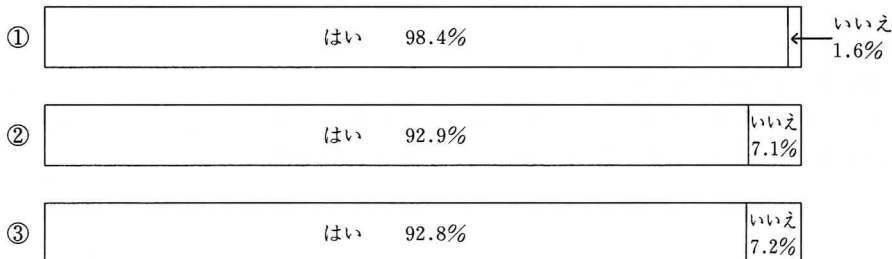
#### 調査対象

- ① 59年度2年生 65名中回答数63名  
実習期間 昭和59年10月1日～10月28日
- ② 60年度2年生 58名中回答数57名  
実習期間 昭和60年10月1日～10月21日
- ③ 61年度2年生 70名中回答数69名  
実習期間 昭和61年10月1日～10月21日

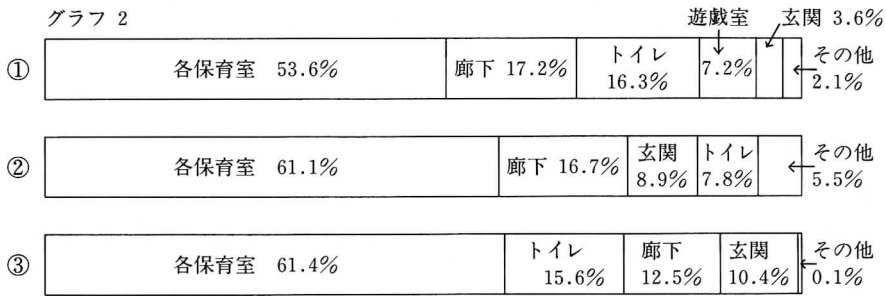
#### 結果及び考察

- 1) 幼稚園で壁面構成がなされていましたか。

グラフ 1



2) 園内で構成されていた場所はどこですか。

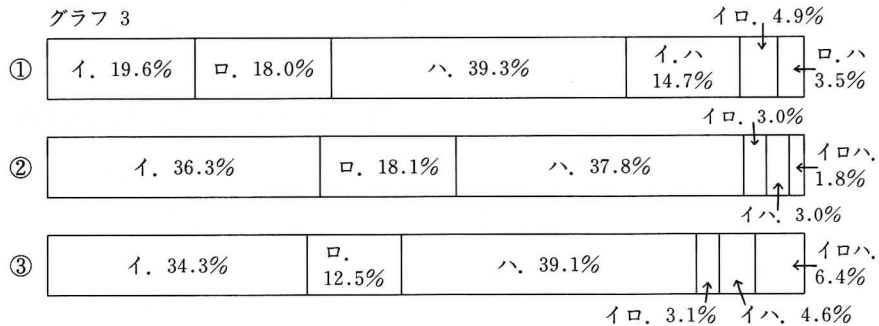


3) 作品の構成は次のどれにあたりますか。

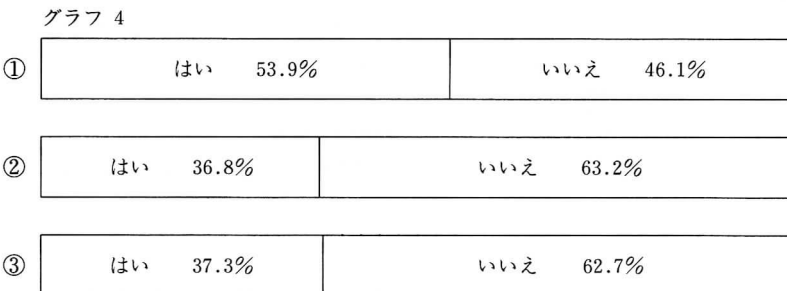
ロ. 幼児の作品を主体に構成

イ. 教師がすべて構成

ハ. 先生の作品と幼児の作品とで構成



4) 実習園で壁面構成の実習をしましたか。



5) それは何をテーマにした作品でしたか。

(回答数の多い順に10回答選出)

- ① いもほり ② 遠足 ③ 秋 ④ 栗拾い ⑤ 運動会 ⑥ くだもの列車 ⑦ どんぐり ⑧ きのこ ⑨ おどう  
 6) 実習した回数は何回ですか。そして、それはどの  
 ⑩ さるかに合戦  
 程度のとりくみですか。



②	1回 80.9%		2回 19.1%
③	1回 61.5%	2回 23.0%	3回 15.5%

グラフ 5-2

①	すべてまかされて構成した 47.2%	一部の手伝いをした 52.8%
②	すべてまかされて構成した 76.2%	一部の手伝い 23.8%
③	すべてまかされて構成した 73.0%	一部の手伝い 27.0%

## 7) 学校で経験する必要があると思いますか。

グラフ 6

①	はい 96.8%	いいえ 3.2%
②	はい 96.5%	いいえ 3.5%
③	はい 96.9%	いいえ 3.1%

調査の結果、実習した幼稚園の90%以上で「壁面構成」がなされており、その60%は保育室であった。また、その構成は、教師の手によるもの、幼児の作品を主体にして教師が構成したもの、教師の作品と幼児の作品を作って構成したものといろいろあるが、いずれも教師の意図によって作成されている。

実習中に「壁面構成」に携わった学生は約40%で、そのうち70%はその作成をまかされている。このことは「壁面構成」が幼稚園で重要であることを物語ると同時に、その作成が教師にとってかなり負担となっていることも伺える。作成については、大学で経験しておく必要があると回答した者が、各年次とも96%をこえていることは、大学の養成カリキュラムにこのような技術・能力を養成しておくことが必要であることを示している。

## III 「壁面構成」指導の実践

## 1 指導の単位と回数

昭和59年7月に5号館（主に幼児教育学科関係施設）ロビーに壁面ボード（275 cm×90 cm）を設け、必要とされる画用紙等の材料を準備した。

## 対象学生

広島文化女子短期大学 幼児教育学科学生

## 作成回数

昭和58年度入学生 65名

各クラス単位（約30名）1回ずつ

昭和59年度入学生 63名

クラス½単位（約15名）1回ずつ

10人単位 1回ずつ

昭和60年度入学生 70名

クラス½単位（約18名）1回ずつ

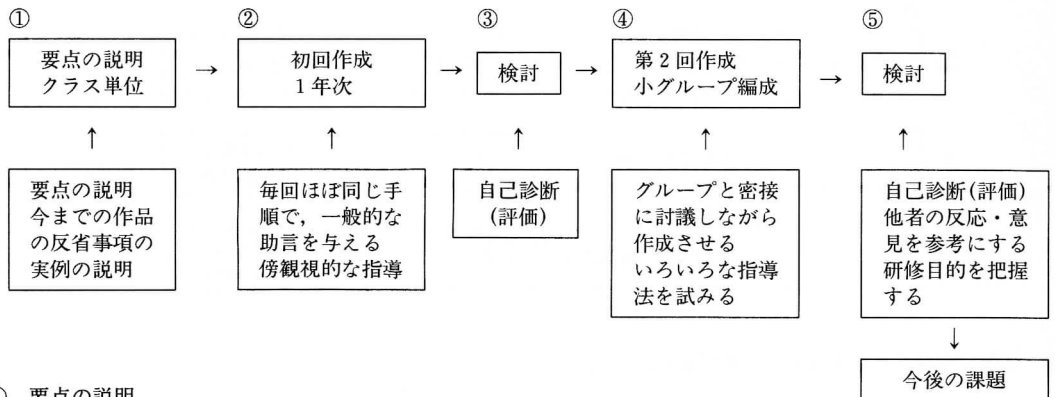
## 10人単位 1回ずつ

59年度60年度入学生については、いずれも、1年次にクラス½単位で作成し、2年間で各自2回経験できるようにした。1年次は1カ月ごと、2年次は2週間ごとの割合で進めていった。作成日時は授業外の空き時間を利用した。

## 2 指導経過及び内容

指導経過は、各グループに対して、次の図で示すパターンで行った。

## 作成指導の手順



## ① 要点の説明

壁面構成作成にあたって、必要と思われることを、事前に学生に知らせるため、グループ分けをする前にクラス単位で説明の時間を設けた。指導の要点は次のとおりである。

- ・壁面構成とは、幼児の精神の安定を図り、園生活を楽しく過ごすための環境構成物である。
- ・主に幼稚園教育要領の6領域の中の絵画製作の分野に属するが、自然・社会とも密接な関係があること。
- ・作成するにあたり、テーマを決める際、ねらいを明確にすること。
- ・参考資料を参考にするのはよいが、全く同じものではなく、いろいろなアイデアを出し工夫して作成すること。
- ・季節感や行事を感じられる作品であること。
- ・想像力を広げることのできる作品であること。
- ・空間の使い方や素材の性質、配色などを考慮し工夫すること。

以上のような要点に具体例を補足し、作成前の心得として学生に説明した。

## ② 第1回目の作成

作成にあたっての順序では、まずリーダーを決め、そのリーダーが主になってグループへ働きかけ、テーマ・構図を導き出す。それからグループ内でアイデアを出し合い作成するという形式ですめる。

学生自身とまどいながら作成するが、指導の方もあまり詳細に助言を与えない。

## ③ 検討

作成後は作成グループを壁面の前に集め、検討会を行った。

作品について、全体的あるいは部分的に、違う視点からアイデアを提示し、多様な見解を持つことができるような指導や、構成する際の押しピン・テープなどの使用方等、技術的な指導を行う。

## ④ 2回目の作成

この作成にあたっては、②の作成時のように傍観視的態度とはらず、学生の討議に加わり指導助言に努めた。時折、違った指導法も試みた。その例として、まずテーマ・構図を決めて与え、その決められた構図の中で工夫し作成させる方法や、筆者自身学生の中に入り、テーマ、構図を細かく考えていく方法などがある。

## ⑤ 2回目の作品の検討

2回目の検討時には、構図上の検討からさらに内容的にみて、どのような効果をもたらすかまで、各々で考えるように導き、実際、現場に出て作成する時の心構えとなるようにする。そして、それらの検討事項と同時に、筆者自身、指導の反省を行い、今後の課題として、よりよい指導法を導こうとした。

## 3 作品内容と検討

次に、実際に作成してきた作品をあげてみる。これまでに作成した回数が、30回余りにもなるが、その中から、学生の初回の作品を6点と2回目の作品を6点選んだ。

## 題目 「あさがお」 (作品 1)

昭和59年7月10日作成

昭和59年度2年21組 32名 初回

ねらい 「季節の花をあじわう」

〔効果・工夫点〕

- あさがお、すいか、簾、蟬等によって夏の季節感が出されている。
- 麻ひもを使用してあさがおのつるを作成し、本物らしくしている。
- 木、金魚鉢、つるまき棒を立体的に作成している。  
〔作成経過・反省点〕
- 人数が多く分散して作成するので、部分的には細かく工夫されていたが、全体の統一性に欠ける。
- 木の作成グループが、幹を作るために画用紙を持ち出していたが、思いどおりにいかない様子なので、画用紙をしわにするよう助言したところ、幹らしく作成できた。
- 簾、つるまき棒をつなぐ糸に麻ひもを使用し、本物らしく表現した。
- 金魚鉢をはじめは平面的に作成していたが、金魚を折り紙で立体的に作成したので、バランスをとるため鉢も立体化させ、中の水の様子もセロハンで表現した。
- 木を作成したが、何の木を作成しているのか明確でない。
- つるを巻かせるよう発案されたのは良かったが、巻き方が反対である。
- 画用紙、折り紙、つや紙とさまざまな材料を使っているが、全体のバランスがとれていない。

## 題目 「どんぐりころころ」 (作品 2)

昭和59年9月21日作成

昭和59年度2年22組 33名 初回

ねらい 「秋の季節のどんぐりをとりあげ、画面からどんぐりころころの歌を連想する」

〔効果・工夫点〕

- どんぐりと柿の木で秋の季節感が出ている。
- 柿の木、幹の部分をクラフト紙で作成し、実の部分をつや紙で作成し立体化されていて実物に似せてある。
- 池をポリ袋で作り、水のしぶきや流れを表現するためにその中に細かく切ったナイロンを入れ、光があたると反射して光るようにした。
- どんぐりころころの歌をさらに連想させるため、

モールで楽譜を作成した。

〔作成経過・反省点〕

- 柿の木のグループは構成が早くまとまり、クラフト紙の材質を上手に利用して幹を作成したり、つや紙で柿の実を作成した。
- どんぐりやどじょうをどう表現するか、しばらく考えていたが、帽子の部分をいろいろな色にしたり、目をつけたりして表情をつけた。
- どんぐりころころの画面にするためには、柿の木ではなくどんぐりの木が良かったのではないかと。
- どんぐりとどじょうを苦勞して作成したにもかかわらず、見映えがせず、マンガ的要素があり、不評だった。
- 風景の草が簡素すぎ、押しピンでとめてあるのも気になる。

## 題目 「雪だるまとかまくら」 (作品 3)

昭和60年1月14日作成

昭和59年度1年21組 31名 初回

ねらい 「雪を使用した楽しい遊びを知らせる」

〔効果・工夫点〕

- 雪だるまを綿で作成しふくらみをもたせ、画用紙でバケツ、モールで手を作成し雰囲気が出ている。
- かまくらは、模造紙に新聞紙をつめて立体的にし、中は子供達の顔を平面的に作成してあるので、奥行きを感じさせる。
- かまくらの中の子供達の部分は、バックが黒であることを生かして、顔の形だけを作成し、髪の毛の部分は作成しなかった。手ぶくろがそれぞれ違う色で作ってありまとまっている。
- 雪に関するものをとりあげているので冬の季節感を感じる。  
〔作成経過・反省点〕
- 雪だるまは、早く構想も練られすぐに作成されたが、かまくらの作成にあたり、模造紙を使って立体化させようと試みたところ、貼りつける際に紙の端が破れたりして困難だったが、貼りつけ部分を雪で覆い形よく仕上がった。
- 地面がないので不安定である。
- 雪だるまとかまくらが、同等の大きさに構成されているので、遠近感がなく視点が分散してしまった。

## 題目 「くだもの列車」 (作品 4)

昭和60年10月30日作成

昭和60年度1年21組 17名 初回

ねらい 「秋の豊富な果物を知らせ楽しく表現する」

〔効果・工夫点〕

- くり・かき・ぶどう・さつまいもによって秋の季節感が出ている。
- 果物一つ一つ本物らしく作成されている。ぶどうは一粒ずつセロハンでくるみ、丁寧に作成された。
- 汽車に路線と煙を加えて作成し躍動感を出している。
- 汽車はダンボール紙に画用紙を貼りつけてあり、厚みを出している。

〔作成経過・反省点〕

- 果物はできるだけ本物に近づけるよう構想され、意欲的にとりくんで作成された。
  - 汽車そのものに工夫がなく、配色がよくなかったの
- で、果物との調和がとれていない。
- テーマを与えて作成させたためか、作品全体に対する意欲が少ない。

題目 「遠足」 (作品 5)

昭和60年11月16日作成

昭和60年度1年22組 16名 初回

〔効果・工夫点〕

- もみじから秋の季節を感じる。
- もみじは折り紙で作った葉と本物の落ち葉も使用している。
- 海を紙テープで表現し、波の様子を出している。
- 壁面ボードの上に濃い藍色で背景の山を作成し、遠近感を出している。
- 配色のバランスもよく、空間も有効に使って無駄がない。

〔作成経過・反省点〕

- 遠足というテーマから宮島を連想し、とりい、しか、海等で宮島を表現している。
- 背景においては、山や海、そしてもみじとバランスよく配色よく作成している。
- 子供と鹿がマンガ的で、背景と不統一なので、もっと子供の表情や動き等工夫すればよい。

題目 「豆まき」 (作品 6)

昭和61年2月1日作成

昭和60年度1年21組 18名 初回

ねらい 「節分の行事に親しむ」

〔効果・工夫点〕

- 鬼が正面をむき、むこう側からこちら側へ逃げてく
- る様子がよくあらわれている。
- 子供が小さく、鬼は壁面ボードからはみ出すほど大きいので、遠近感が出ている。
  - 鬼の突起部分 (つの、へそ、ひげ) や豆が立体的に作成されている。
  - 動きの様子が壁面の中に出ているので、1つの物語を感じる。
- 〔作成経過・反省点〕
- テーマを決める時点から構図の詳細まで、話し合いで決め作成した。
  - 全体に平面的な作品になったので、もっと立体的に作成するとよかった。
  - ボードの色が薄い色なので、構成物があまりひきたたなかった。

題目 「雨の日」 (作品 7)

昭和60年6月3日作成

昭和60年度2年21組 10名 2回目

ねらい 「梅雨の季節を知ると同時に雨ふりを楽しみ気持ちにさせる」

〔効果・工夫点〕

- 傘と雨ぐつで雨ふりということがすぐわかる。
- 平面的な構造にしているが、デザインを工夫したり、雨つぶを大きくして、効果を出している。作品全体もバランスがとれ、リズムを感じるような作品になっている。
- 天井から雨つぶをつり下げて、動くようにしてあるのが楽しい。数個作成してもよい。
- 梅雨の暗さを感じさせないような、パステルカラーの配色も効果がある。

〔作成経過・反省点〕

- 構図も早くまとまり、短時間で作成した。
- 両側にかたつむりを作っているが、画用紙にマジックで絵をかき、切りとってあるだけなので、簡素すぎる。

題目 「お父さんありがとう」 (作品 8)

昭和60年6月17日作成

昭和60年度2年22組 10名 2回目

ねらい 「父の日を認識し、感謝の気持ちを培う」

〔効果・工夫点〕

- 父の日の行事を知らせることができる。
- おとうさんありがとうという文字を1つずつプレゼ

ントの型にはめて、楽しく構成している。

- いろいろなお父さんの表情があり、立体的に構成されている。

〔作成経過・反省点〕

- いろいろなお父さんの顔の表情を表わすために、三角、四角、丸の形を使い分け、丸めたり、とがらせたりと、紙の材質を上手に利用している。
- 体の部分が平面だが、もう少し動きをつけてもよかった。
- 配色が暗めなので、明るい色にするか、バックの色を変えたとよかった。

#### 題目 「七夕」 (作品 9)

昭和60年7月1日作成

昭和60年度2年21組 10名 2回目

ねらい 「七夕の行事に親しむ」

〔効果・工夫点〕

- 笹飾りと浴衣・はたるとすいかで夏の季節と、七夕の行事を充分に感じられる。
- バックの色を黒にしたのも、構成物がひきたって効果がある。
- 子供の髪の毛と帯が立体化され、浴衣もきれいに図柄をつけ、まとまった作品になっている。
- 子供の姿が後ろ姿であることも、想像がふくらむよいアイデアである。
- 天井からは星がつるしてある。

〔作成経過・反省点〕

- 構成がまとまるとすぐにとりかかり、発想豊かに作成していった。
- バックを黒にしたが、丁寧に貼れていない。

#### 題目 「花火大会」 (作品 10)

昭和60年7月22日作成

昭和60年度2年22組 10名 2回目

ねらい 「夏の風物の一つの花火大会をとりあげ、季節感をあじわう」

〔効果・工夫点〕

- 花火と浴衣の親子づれで夏らしさを感じる。
- 黒いバックに、いっぱい広がる花火が強調されている。
- 背景をセロハンで作ってあるので、光があたるといろいろな色に光り、花火の反射のように感じとれる。
- 花火がつや紙で構成されているので、より印象的である。

- 静と動がうまく調和されている。

〔作成経過・反省点〕

- 前回の七夕の影響をうけた様子で、バックの色や浴衣、構想のまとめが類似している。
- 全体に平面的である。

#### 題目 「敬老の日」 (作品 11)

昭和60年9月12日作成

昭和60年度2年21組 11名 2回目

ねらい 「敬老の日を知り いたわりの心を育てる」

〔効果・工夫点〕

- 敬老の日の行事を感じることができる。
- おじいさん、おばあさんの頭や風船がボードから飛び出し、大きな画面になった。
- 子供達をダンボールに貼って上からつり下げてあるので左右にゆれる。
- 子供達の服の模様は、すべて色紙で作られ、手がこんでいる。

〔作成経過・反省点〕

- 最初は、平面でボードの枠内に納めるよう構想をたてていたが、ボードから飛び出し、子供達をつり下げる作品に変わった。
- ボードの色が薄いので、構成物がひきたたない。
- 背景が工夫されていない。

#### 題目 「お月見」 (作品 12)

昭和60年9月20日作成

昭和60年度2年22組 11名 2回目

ねらい 「お月見の行事を意識づける」

〔効果・工夫点〕

- 大きな月とおだんごすすきによって、お月見の行事の雰囲気を感じることができる。
- 明るく大きな月が、周りの暗い色で作成されたうさぎやすすきをてらして幻想的なイメージを感じさせる。
- 綿で雲を表わしているので、浮雲のようなあじわいがある。

〔作成経過・反省点〕

- ボードの大きさを充分に考慮して、月やすすきの大きさ、長さを計算にいれて作成している。
- 切り紙的な要素をふくんでいるこの作品に興味を持って作成した。
- うさぎの数を増やし、バランスがとれた。

- おだんごだけが立体的で、アルミハクを使用しているが、この構図には不調和である。設置場所も考慮するとよい。



作品1 「あさがお」



作品2 「どんぐりころころ」



作品3 「雪だるまとかまくら」

#### IV 考 察

3年間という期間内の30点余りの作成指導をもとに考察を加えてみる。



作品4 「くだもの列車」



作品5 「遠足」



作品6 「豆まき」

##### 1) 学生の意識に及ぼす効果

壁面構成を備えつけただけで、学生の意識が変わってきている。毎日、何気なく「壁面構成」を見ていることによって季節の変化を感じ、行事を思いおこし、





作品7「雨の日」



作品10「花火大会」



作品8「お父さんありがとう」



作品11「敬老の日」



作品9「七夕」



作品12「お月見」

そこから歌へ物語へといろいろな方向に各々が想像を巡らせていく。その「壁面構成」を見、さらに作成することにより、自然事象、社会事象などをより敏感に感じ、観察力も自然に身についてきているようである。学生自らが感性を養っているように思われる。この「壁面構成」は視覚を通して一人一人の心に訴えかけていくので、視覚教育ともいえるだろう。「壁面構成」

がおかれていることによって、入学時の学生も幼児教育学科に入学したという実感が湧いたと語っているし、幼稚園教諭、保育になりたいという願望もふくらんでいるようである。「壁面構成」が保育者育成の環境として役立っていることが分る。

初回の「壁面構成」作成にあたった学生は、「壁面構成」という言葉にも不慣れで、作成意欲はあるが作

成することばかりにおわれて「壁面構成」の意義・内容や全体的構想をつかむことができなかった。しかし、自分の作成経験をもとにして数多くの作品を見ることにより、次の作品を期待したり自分の作成順番を心待ちにし、作品についていろいろ想いを巡らせるようにもなってきた。さらに教育実習から帰ってくると、実際に現場で見てきた壁面構成の良い所、悪い所等自分なりに評価する目をもち、自分ならばこのように作成したいという見識ももてるようになった。

## 2) 指導方法について

指導方法については、前述したように説明・構図立案・作成・検討の形式で進めていくが、指導法を変えてみると作品にも実際に変化がみられた。例えば、昭和60年度10月に作成した「くだもの列車」(作品 4)のときに、あらかじめ構想を与えて作成させたところ、それぞれの果物は手のこんだ実物に近い物を作ることができるが、受身的な立場で取り組んでいるためか意欲に欠けるように思えた。構成してみると汽車と果物とがアンバランスのようである。昭和61年2月の「豆まき」(作品 6)の例では、最初のテーマを決めるときから学生と一緒に考え、構図・構成・配色等、話し合いによっていろいろな意見を出しあった。すると、子供に豆を投げさせ、鬼が画面から走って逃げてくるように大きく配置して遠近感を出すなど、具体的に構想をたてることができ、作成するにあたってもスムーズに意欲的に取り組んでいった。したがって指導のあり方としては、作成前に学生の発想を引き出すための時間をもち、テーマや構図、使用する材料まで具体的に充分検討させておくことが必要であると感じる。そうすると、学生は作成にあたって、その手順を理解し、いろいろな発想を出しあうことによってよりよいものを見出すことができ、ねらいを理解したうえで作成することができる。よく検討されて作られた作品は、見る側にも内容が把握しやすく、統一されてまとまった作品だと分る。

## 3) 幼児との関連

学内実習では、作品に対する幼児の反応を見ることができないが、幼児の視点にたって考え、幼児がどう反応するか予測する習慣を養うことが大切である。現場に出たときに注意して幼児の反応を観察する目を養うことができる。実際に教育実習から帰ってきた学生が、園で見た「壁面構成」と幼児の反応を観察し、それによって「壁面構成」を作成するにあたっての留意点を次のようにあげている。これはアンケートをとり

まとめたものである。

- 幼児は自分が作成したものが飾られていると大変喜ぶので、幼児の作品を大いに壁面にとり入れるとよい。
- 身近なものや行事に沿ったもの。
- 立体的なもの。
- 季節感のあるもの。
- 夢をふくらませるようなもの。
- 動く物などを表現するときは、今にも動き出すような工夫をするとうい。
- 親しみやすく何度でも見たいという気をおこさせるもの。
- 色使いのきれいなもの。
- はっきりした色を使い、物・人物などは、なるべく大きく作った方がよい。
- 日常生活の中で使われているものでも、壁面の上では色を変えたり形に変化をつけたりする方がよい。
- マンガ的ではなく、実物に近いようなもの。
- 壁面の画面が変わったとき、幼児は非常に喜びを示し、幼稚園に行く楽しみの一つとなっているので月に1回は変えた方がよい。
- 幼児の背の高さにあわせて構成物も充分気を配るべきである。

予想以上に学生達は「壁面構成」についていろいろなことを感じとってきている。学生もまた、幼児が「壁面構成」に対し非常に敏感に反応している姿に驚きを示していた。

筆者が現場の「壁面構成」の研修として、半年間週1度幼稚園に行って「壁面構成」を作成した経験から学んできたことのひとつとして、“「壁面構成」は、幼児(対象となる者)に対し、教育的意義のあるものでなくてはならない”ということがある。例えば、そこで作成したものとして「かえるの卵とおたまじゃくし」という、卵からかえるになるまでの成長過程を壁面に示した作品があるが、それを見た幼児の中でおたまじゃくしとかえるを同じものとしてとらえていなかった幼児が大変驚いていたとの報告を聞かされた。そしてその幼児は、きとおたまじゃくしの観察を注意深くするだろうし、このようなことが教育的意義に値すると言われた。さらに、この壁面の前に、おたまじゃくしの入った水槽を置くことによって、より効果的なものになった。幼児の理解は、感動をとまなびはじめて成立すると言われるが、まさにこのようなことを言うのだらうと痛感している。

## 4) 技術の工夫

大学で作成する作品も、年度が経つにつれ変化が見られてきた。まずはバックの色を変え、主体をひきたたせるようになってきた。それから、表情のあるものを効果的に使うようになり、材料も綿やセロハン・本物の落ち葉など多様に使いわけるようになり、それらをボードに接着する際も、最初は押しピンやテープが表に見えても平気でとめていたが、次第に接着に使用するものが見えなくなってきた。一番大きく変わったと思われることは、初めは壁面ボード内に納まって作成されていた作品も、だんだんボードから飛び出し、人の目をひきつけ、心に訴え、より躍動的な作品になってきたことである。

## 5) 作成にあたっての問題点

作成経過からいろいろな変化が見られてくる中で、いくつかの問題点もあげられる。作成にあたっては、豊かな発想・観察能力、作成能力を必要とするが、その作成にあたる学生達の発想について見てみると、現代の都会化した環境で育っている影響からか、まずは自然現象の観察力のあまざ、生活体験の貧弱さを感じる。例えば、あさがおのつるの巻き方が反対であったり、表わそうとする木の特徴を思い描くことができなかつたりする。木・葉・花など、背景としてよく使用するが、最初に指摘せずに作成させた場合は、ほとんどといってよいほど、色、形が類似しており、しかしそれが、何の木であるか、何の葉か花か明確でない。色彩感覚においては、明るくさまざまな色を使用し、優れているといえるが、人物や動物等を作成するにあたって、単調で、マンガ的になりやすい特徴がある。作成に使用する材料も豊富で、既成物に囲まれていることから、材料を生み出す発想や選択能力に乏しく、素材を生かす技術も身につける必要があると言える。

## V お わ り に

この研究は、幼稚園等でよく用いられている「壁面構成」について、その必要性を調査し、幼稚園教諭の資質の一つとして、「壁面構成」の意義の認識と作成能力を養成するための方法を実践を通して検討したも

のである。その結果、次のようなことが明らかとなった。

(1) 「壁面構成」は、幼稚園の殆んどで行われており (95%)、教育実習でも実習にとりあげられている。学生も、大学で「壁面構成」について学習しておきたいと希望している (97%)。

(2) 「壁面構成」の指導においては、次の段階が必要である。先ず最初に作成してみることに。次に他の学生の作成した作品に接すること。次に、目的意識をもち構想を検討した上で作成すること。

(3) 幼児の視点で作品を考え、幼児の反応を予測できるようにすること。

(4) 技術的には、大きさ・遠近感・立体構造等、そのねらいにあった方法をとることができること。身近な材料を用いて工夫することができること。

(5) 季節感・行事・お話の場面が明確であり、その主体となるものを表現することができること。

今後、「壁面構成」実習の指導のあり方を分析的に検討し、体系化するよう研究をすすめていきたい。

## 参 考 文 献

- 1) 大場牧夫編著：壁面構成12か月，世界文化社。
- 2) 大場牧夫編著：園行事の壁面構成，世界文化社。
- 3) 大場牧夫編著：壁面構成デザインブック，世界文化社。
- 4) 長谷川雅司編著：新しい壁面構成12か月，ひかりのくに株式会社，1984。
- 5) 紺野サキコ著：園児と作る壁面構作，協栄社，1982。
- 6) 松石治子著：室内環境づくり12か月，ひかりのくに株式会社，1968。
- 7) 井藤芳喜：教育実習前の授業研究の必要性和理科の模擬授業の試み，広島大学学校教育学部紀要，1984，第1部，第7巻，pp. 115～127。
- 8) 竹下政範，渡辺義生，重信陽二：理科指導のための技能研修の適正化その1，生物教育，1978，第19巻，第2号，pp. 7～10。

### Summary

In this study a survey was conducted to confirm the necessity of making the decorations on the walls which are often seen at kindergartens and nursery schools. Confirming the necessity, the guidance methods, which help teachers at those institutions to understand the meaning of the wall decorations and also to get the knowledge to make them, are discussed referring to the writers experiences.

The results of the survey showed that most of the kindergartens' walls (95%) were decorated with various things. And the apprentice students at such institutions are expected to participate in making the decorations, therefore students showed preference for studying wall decorations at schools (97% of the students preferred).

As a conclusion of this study, following things are suggested for the guidance to make the wall decorations:

- 1) Teachers or students who are interested in the wall decorations should try to make them by themselves first. Then they should try to look other people's works. After that they should try to modify their own works having their objectives in view.
- 2) The creators of the wall decorations should have children's views and be able to expect the children's reactions to their works.
- 3) The creators of the wall decorations should have the skills to show the dimensions, distances or three-dimensional sensation and also be able to use them properly making use of popular materials in their works.
- 4) The creators of the wall decorations should be able to express the feeling of the seasons, events or the situations of the stories clearly and properly referring to the themes in their works.